

日本の歴史教科書におけるフランス革命・ナポレオンの位置づけ

松本 通孝

How were the French Revolution and Napoleon treated in History Textbooks in Japan ?

Michitaka Matsumoto

In history education in Japan, the French Revolution and the Napoleonic Era have always been thought highly of since 1872, when school education began in Japan. Today, I will compare and examine the narrations in such textbooks as “world history” textbooks in the early Meiji Era, “western history” textbooks written after the Sino-Japanese War, and “world history” textbooks written after World War II, so that I may point out problems/issues in the ways of narrating the history of the French Revolution and Napoleon as well as in the ways of accepting the descriptions in Japan. Particularly, I would like to examine the meaning of teaching the French Revolution in history education today in the twenty-first century.

I. はじめに

本日のシンポジウムに参加した国々の多くは、ヨーロッパ諸国や日本による植民地支配や占領からの解放を体験・克服して現在に至っている。それに対し、日本は19世紀半ばの開国以来、富国強兵策をとり「脱亜入欧」をスローガンに、天皇中心の国家主義的な政策を推し進め、19世紀末以来帝国主義国の一員として東アジア諸国を支配する側に立った。歴史教育も帝国意識を育てる上で、重要な役割を担ってきた。そして、1945年の敗戦とともに、歴史教育も大きく変わり現在に至っている。

歴史教育はその時々々の政治体制の影響を受けやすいと言われている。特に、フランス革命が提起した「自由」「平等」「ナショナリズム」等々の概念は、国を越え、時代を越え近現代の国々・人々に大きな影響を与えてきたが、日本一国を見ても、その受容の仕方は様々である。

私は1960年代後半に高等学校の世界史教員となり現在に至っているが、60年代・70年代は、フランス革命の理想、普遍的理念を熱っぽく語っていた覚えがある。しかし、80年代以降、フランス革命が提起した理念が、欧米社会の中にあってもマイノリティに対して自由・平等・ナショナ

リズムなどが実現されているのか、また、非ヨーロッパ世界にとっても普遍的であり得るのかという疑問が生じ、ナショナリズムの問題、女性・地域・植民地の奴隷制、第三世界における近代化と欧米の外圧などの問題に触れつつフランス革命から何を学ぶか、またフランス革命の限界は何かという視角で授業を進めている。

本報告では、フランス革命・ナポレオン期が日本の歴史教科書でどの様に扱われてきたかを検討し、その時々の特徴および問題点を指摘してみたい。その際、発行された歴史教科書の名称により三つの時期に分け、第1期を「万国史」教科書の時代とし、学制発布の1872（明治5）年から教則綱領改定の1894（明治27）年までの国民国家形成の時代。第2期は「西洋史」教科書の時代として、日清戦争から1945（昭和20）年の敗戦までの大日本帝国の時代。そして第3期は敗戦以降現在までの「世界史」教科書の時代としたい。

日本では、上記のいずれの時代においても、歴史教科書の中でフランス革命・ナポレオン期の叙述の占める比重は極めて高い。特に「戦前」と呼んでいる第1期、第2期においては、教科書の総ページ数の平均7%（約22ページ。しかも、フランス革命叙述の約6割以上はナポレオン期である）を当てており、如何にフランス革命、特にナポレオンに注目していたかが分かる。因みに戦後の世界史教科書でもフランス革命・ナポレオン期の叙述は平均2.8%（約9ページ）を占めており、イギリス革命、アメリカ独立革命と比べても約2倍のページ数を割いている。このような歴史教科書におけるフランス革命・ナポレオン叙述の重視の理由はどこにあるのだろうか。また、それぞれの時代で叙述内容がどう変化してきたのか、歴史教科書の叙述を手がかりに探ってみようと思う。

Ⅱ. 「万国史」教科書・「西洋史」教科書における、フランス革命・ナポレオン叙述

第1期 「万国史」教科書の時代【1872（明治5）～1894（明治27）】

（1）1872（明治5）年から日本における学校教育が始まり、上級小学（現在の小5～中2）において「万国史」が教えられることとなった。教科書は翻訳教科書と呼ばれアメリカ人グッドリッジの『パーレー万国史』『五州記事』などがその底本となっていた。[1] [2]

これらの教科書は、アダムとイヴから始まるキリスト教的普遍史の形をとり、ローマ帝国滅亡以降は各国史となっており、フランス通史の中でフランス革命・ナポレオン期を扱っている。その主な特徴を記すと、

1. アンシャン・レジーム期の国王の専制と民衆への同情を記した上で、革命が勃発したことに触れているが、その後の封建制廃棄、人権宣言、自由主義的改革、国民議会、立法議会への言及はない。
2. 「民間に過激党なる者、人心を煽動し、賤民を鼓舞し・・・暴虐を窮めて・・・」に見られるように、ジャコバン派への恐怖、民衆を暴徒とみなし「9月の虐殺」「国王処刑」に対し「其残忍暴戾なること歴代未だかつて見ざるの凶乱なり」、恐怖政治については、共和政治であっても「其惨毒なること君主専治の国より甚たし」と評してい

る。

3. ナポレオンに関してはフランス革命からナポレオン期の叙述8頁の中、5.5頁を割いており、その詳しい戦績と欧州各国を打ち破ることによって、大いに人望を得、皇帝に昇ったこと。ただし「スペインの人民其作謀を怒り、土寇各所に蜂起す」とナポレオン一族支配への抵抗を記し、スペインのゲリラに苦しめられたことを記している。

(2) この様な治乱興亡的なパーレー型の万国史と併行して、ギゾーやバックルらによる開化進歩、自立自由を追求した文明史の翻訳がなされ [3]、教科書としても使われ自由民権運動に大きな影響を及ぼしたと言われている。この文明史の流れを継承して教科書として広く使われたのがフリーマン、スウィントン、天野為之らの「万国史教科書」[4] [5] [6] であった。これらの教科書はヨーロッパ大国中心、白人種中心、国民国家の成立などを特色としていたが、その中で、フランス革命関係の叙述の特徴を記すと、

1. フランス革命からナポレオン期の叙述が、エピソードを混じえる形で、非常に詳しくなり、スウィントンの「万国史」では実に68ページ(8%)に及び、中でもナポレオンについては22ページを割いているのが特徴である。
2. 1789年、貴族・僧侶がその特権を放棄したことは書かれているが、人権宣言・自由主義的改革・議会の変遷については全く触れていない。
3. 戦後の教科書には殆ど出てこない1792年「9月の虐殺」について「人心皆狂妄迷乱、前後を弁せず殺戮を以て快楽となし、婦女の如きも悦んで人の死するを觀るに至り」と記し、更に国王処刑後を「恐怖の世」「戦慄時代」と呼び、民衆を暴戾残虐と評している。2、3は自由民権運動の退潮、大日本帝国憲法制定に向けての立憲体制を整備しつつあった時代の影響と見ることが出来るであろう。
4. ナポレオンに関しては、対外戦争の戦績を詳しく取り上げ、全体的にはナポレオン礼賛の内容になっているが、新聞紙の検束、政談の閉鎖、探偵の横行など「人民は知らず識らず自由を失ふの昔を忘るる者多く・・・人民の自由を犯し又は恣まに外国の権利を妨げたり」と内政・外交の批判も記している [6] [7] のは戦後の教科書にも見られない特徴である。これは自由民権運動の影響と同時に、朝鮮・中国との複雑な外交関係を反映していると評することができるであろう。

この様に1880年代後半の特徴としては、翻訳教科書から日本人の手による教科書への移行期に当たっているが、①民衆の運動を恐怖ととらえており、「9月虐殺」「国王処刑」「恐嚇政治」を導くものとして描いていること。②フランス革命の自由・平等についての叙述はないこと。③ナポレオンに関しては、その後の教科書が無条件の礼賛となるのに対し、国内で人民の自由を制限したが、対外的戦功により国民の支持を獲得したこと、スペインのゲリラなど反ナポレオンの動きにも言及していること等が特徴である。

第2期 西洋史教科書の時代【1894(明治27)～1945(昭和20)】

(1) 日清戦争の始まった1894年、日本の歴史教育も大きな変革期を迎えていた。即ち、今まで

の「国史」「支那史」「万国史」に替わって、「日本史」「東洋史」「西洋史」の三分法に変わったのである。その背景には、立憲体制が確立した1890年頃から、欧米礼賛の「万国史」に対する日本主義的立場からの批判が登場し、それまでの「劣亜」意識から「アジアの盟主」としての日本を目指す姿勢が出てきたことがその背景にあったと思われる。

この時期は50年の長期にわたるので、一概にまとめることには無理が伴うが、基本線は日清・日露戦争期に確定するので、1900年前後の西洋史教科書 [7] [8] [9] [10] を中心にその特徴を見ていきたい。

1. 「巴里の暴民狼藉を極めり」など民衆を暴徒とみる見方は昭和前期まで一貫しており、ジャコバン独裁期については、前の時代と同じく「恐嚇政治」の名称で、「悲惨」「兇暴」「残虐」などの修飾語が使用されている。その他、この時期の教科書の特徴として、「9月の虐殺」「恐怖政治」を強調する姿勢は、日清戦争後の明治政府の民衆に対する姿勢によるのではないかと見られる。
2. 国民公会の公安委員会による理性の崇拜、共和暦、徴兵制など諸政策については、国民の統一をはかり、内乱を鎮め外敵を撃退するという当時の日本国家にとってプラスの意味でのナショナルな側面への言及が増えているのが特徴といえよう。
3. 「封建制廃棄」「人権宣言」「自由主義的改革」についても、多くの教科書は触れていない。例外的には「寺院の不動産を没し、官職は僧俗共に民選に、全国の度量衡・金銭・法律を一定し、貴族・平民の別を破て平等の主義を採る」[7] などがあるが数点に過ぎない。
4. ナポレオンに関しては、前の時期と同じく、詳しい戦績の記述の他に、商工業の奨励、道路・運河の開削、学芸奨励そしてフランス革命の成果を結実させたナポレオン法典など、内政面に対し積極的評価を行ない、国民的支持で皇帝に選ばれたことがこの時期の記述の特徴である。前の時期に見られたナポレオンの内政への批判は姿を消しているのも特徴である。
5. ナポレオンの没落の原因として「直轄地・半属国に於て旧弊を除き新政を布き、民益を起せること少からずと雖も・・・併呑を恣にし、深く諸国の民心に印せる愛国の感情を激発せることを悟らず、加え大陸封鎖により各国民の怨恨憤激を招き・・・愛国情熱の先づ勃発せしはイスパニアの人民なり」[8] に代表されるようにナポレオンの大陸支配への反抗として、各国民の不満から愛国心が醸成され、反ナポレオン運動が起きたことが書かれ始めたのも特徴である。
6. 極めて例外的ではあるが、植民地における奴隷制廃止とハイチの独立に言及する教科書が日露戦争期に出てきていることは注目に値する。[8] [9] [10]
7. フランス革命全体の評価として、「フランス人は自国内に残存せる諸種の封建的遺弊を一掃し去らんと欲し、徒に理想に馳せて實際を離れ、つひに惨憺たる大革命を起し、すべての旧物を無差別に転覆し、秩序全く乱れ、ここにナポレオンの武断を見るに至りたり」[8] とオーラルに学んだ箕作元八によるフランス革命観が出てくるのは注目される。

この時期の特徴としては、日本が帝国主義国の一員となり、「アジアの盟主」意識の下で「古来東洋に位せる幾多の国は、率ね衰亡しけるに、わが国は万世一系の皇室を戴き、泰然として東洋の一方に位せり」[9]と朝鮮・中国への蔑視意識を強め、民衆運動への警戒と恐れ、国家統合というナショナリズムの喚起が明確に現れてきている。一方、西欧帝国主義国による植民地支配の拡大を意識してか、「欧州列強は1871年以来国富を傾倒して軍備を拡張し・・・弱を苦しめ国を奪ひ自ら足れりとする事なし」[11]という西欧観が登場し、5、6に見られるような支配された側、植民地側からの捉え方が出てきているのは注目される。

(2) 1910年代から20年代になると、明治末期に確立された歴史教育の基本線が若干変化し始める。それは、一つは「大正デモクラシー」と呼ばれる戦前の日本にあって比較的リベラルな時代を迎えたことと、その一方で、1911(明治44)年に「中学校教授要目」の改訂が行われ、「1. 生徒の徳性の涵養に資せんために、偉人の壮行・事業及び当時の事情を詳にすること、2. 外国歴史で、我国体と背馳する事歴に就きては彼我国情の異なる所以を明にし・・・」と規定されたことが大きな影響を及ぼしたと思われる。

この時期のフランス革命・ナポレオン期の特徴を記してみると

1. 大正デモクラシー期の初めに「貴族・僧侶等の有したる一切の特権を廃し、極端なる自由平等主義による『人権の宣言』なるものを発し・・・」[12]という教科書が現れ、人権宣言を「極端な自由平等主義」と評してはいるが、封建制廃棄、自由主義的改革に触れる教科書も徐々に増えてきた。[13] [14]
2. 対外的な危機感の中で、義勇軍の結成、徴兵制の施行など国内のナショナリズムを喚起して、外敵に勝利し、愛国心が説かれる様になった。[14]
3. ナポレオンに関しては、その人物および戦績の記述が詳しくなった一方、兄弟による大陸支配に抗して、各地でナショナリズム運動が巻き起こり、スペインをはじめ各国民の「愛国心を激発した」ことが強調される様になった。

以上に見られるような特徴が、大正期から現れ始めたのであるが、昭和期に入り、戦時体制の中で新しい教科書の発行も少なくなり、1931年に再改訂された「教授要目」で日本と関係の深い外国史という色彩が強められる中で、叙述全体も簡略化され、1945年を迎えたのである。この戦時期において、注目されるのは、国王処刑に関して「かかることは臣民を『おほみたから』として愛撫したまふ我国天皇の統治下では絶対にありえない。我国の国体が西洋諸国と全然異なるを思ふべきである」[15]と、日本の天皇制との関連で捉える記述が出現してきたのが注目される。

この時期の特徴は、概ね明治末期の教科書を継承しながらも、大正デモクラシーの影響下に、人権宣言・自由主義的改革などの叙述が増え、ナショナリズム、特に愛国心に関する記述が目立ってきたが、昭和前期を迎えるにあたり、国史教育に重点を置くことに反比例して、外国史教育の簡略化が進み、内容的には後退していった事があげられる。

Ⅲ. 第3期 戦後の世界史教科書の変遷とフランス革命・ナポレオン叙述

(1) 戦前の皇国史観に基づく画一的な歴史教育を批判する中で、1947(昭和22)年に学習指導要領(試案)が出され、戦後の社会科教育が始まった。歴史教育に関しては発足当時、戦前の「東洋史」「西洋史」を踏襲したが、深刻な紙不足もあって新しい教科書は殆どつくられなかった。

1948年に「西洋史」と「東洋史」をまとめて「世界史」という新しい科目が誕生したが、その初期(1950年代前半)の教科書のフランス革命叙述は、[16][17][18][19]に見られるように、戦前の教科書とは多くの点で叙述が一新されている。この時期に戦後のフランス革命叙述のスタイルは確立しているので、その特徴をいくつか拾ってみよう。

1. 8月4日夜の宣言で、封建的特権の無償廃棄が決まったが、封建的地代の無償廃棄はジャコバン独裁下に行われ、農民は土地を与えられた(=自作農の創設)。
2. 自由を抑圧された戦前の統制から解放され、人権宣言を大きく評価し、その後の国民議会による自由主義的諸改革を紹介。ナポレオンはそれらを継承・発展・定着させることにより、国民の支持を受け、更に周辺の封建諸国の民衆の支持を受け、大陸支配を進めていったこと。
3. 戦前の天皇崇拜、民衆への危惧に基づくと思われる国王処刑、恐怖政治への非難が緩和され、より客観的な記述がなされるようになり、ジャコバン独裁下の政策を民衆の視点からみて肯定的に記述するようになったこと。
4. 国民公会時代は、連邦共和政をとるジロンド派と強力な中央集権を主張するジャコバン派の対立として描き、ジャコバン独裁期に封建制度を根底から廃棄し、農民を一切の封建的領主的負担から無償で解放し、食料問題の解決や最高価格法により、農民・都市民衆をフランス国民軍の中核とし、内外の反革命勢力を撃破したこと。共和暦、メートル法、道理の崇拜など国民統一の施策を実施したことなどプラス面に力点を置いている。
5. 戦前の日本において国粹主義という形で過激化したナショナリズムの描き方に関しては、戦前の教科書がナポレオンの戦績をエピソードを交え詳述し、ナショナリズムを喚起していたのに対し、この時期の教科書では、オーストリア・プロイセンによる国境侵犯、対仏大同盟の結成に対する革命の防衛という侵略に対するナショナリズムという意味が強調され、民衆による義勇軍の結成およびヴァルミーでの勝利、徴兵制による国民軍の結成、そして国民の圧倒的支持を受けたナポレオンの軍隊へと続いて行く。
6. 権利の平等に関しては、1791年憲法が能動市民と受動市民を区別し、その結果、革命は継続し、国民公会の成立をもって、男子普通選挙の実現、共和政が実現したことを、民衆の立場に立って評価している。それ故、テルミドールの反動、バブーフの陰謀の描き方が難しくなって来ているのが特徴である。

以上に見られるように、新たに始まった世界史教育の中で、フランス革命・ナポレオン期は、戦後改革の模範としての「典型的な市民革命」としての意味を持ち、封建制の廃棄および近代市民社会への移行、ナショナリズムを客観的に、且つ受動的に描くという方向に関心が移っていることが伺われる。この背景には、敗戦後、日本の再生のために、民主化と非軍事化を基本方針とした戦後改革の影響が考えられる。しかし、急にこのような学問的蓄積が為されたわけではない。一つは、戦前、1920年代から30年代の日本資本主義論争における平野義太郎の研究で、①フランス革命は封建的な体制を打倒し、ブルジョワ的發展の条件をつくったこと、②商品生産・流通における自由・平等、私有財産制を確立したこと、③勤労者たる民衆が革命に参加する事により、ジャコバン独裁下に土地改革が完成、封建制の徹底的な打倒が行われたとしている。もう一つはフランス革命史研究の分野における高橋幸八郎氏の業績である。氏は戦前の日本の封建制を一掃するという視点でフランス革命を捉え、封建的土地所有の廃止が1793～94年のジャコバン独裁期に徹底的に行われ、実現したことに注目し、「サンキュロットの強力的独裁は、封建主義・絶対主義の諸勢力を屈服し、社会の近代化への途を払い清めていった」とした。そして「中産的市民層（ブルジョワジー）がこの運動の先頭に立ち、国民大衆の反封建的エネルギーを集約し指導して近代社会を創りだしていった」とし、フランス革命を典型的なブルジョワ革命と位置づけている。

(2) 1950年代前半までに確立した戦後のフランス革命叙述の基本的スタイルは、60年代、70年代と殆ど変わっていない。しかし、その間アジア・アフリカ諸国の独立や内外の民衆運動・平和運動の進展、などの影響を受け、また、昨年シンポジウムで遅塚忠躬氏が言われたように、日本社会の変化に伴い1960年代を境に、社会経済的諸条件の研究から政治文化についての研究にフランス革命史研究の重点が移ったことを反映し、叙述に若干の変化が見られるようになった。この間の教科書叙述で新しい傾向を拾ってみよう。

1. ジャコバン独裁期における聖職者・亡命者の土地の没収、払い下げに関して、従来の教科書は国有財産の売却が行われ、小土地所有農民が形成された [20] としてきたが、1970年代に入り、柴田三千雄氏は、競売により土地を買えない貧農が多く残されたが、ともかく多数の自作農が創出されたと従来の教科書記述を修正した [21]。これにより、従来の封建地代の無償廃棄によって、自作農が創出されたという叙述が、若干修正され始めた。
2. この時期は、ソブールの研究成果が教科書にも反映されはじめ、革命における民衆運動の役割について、柴田氏は「反対勢力がはげしく抵抗して国際的な干渉戦争にまで発展したこと。このため革命の指導勢力は、革命の達成・擁護のためには数回にわたるバリ民衆の蜂起にたよらざるをえなかった・・・」と革命の指導勢力の変遷を5段階に分け、民衆運動との関連でとらえている [21]。また、東西冷戦激化の中で、共産主義運動の原点として、バブーフの陰謀を私有財産の廃止を唱えていたことが注目され始めた。
3. 東京書籍の教科書 [22] では、革命前に「人々はギルドや都市、貴族などの職能・地

域・身分的団体のなかでくらし、国家はこれらの団体をつうじて人々を統治していた」と社団国家をわかりやすく説明し、革命により「特権的・自立的な団体や身分を取りはらい、個人々人を国民として直接国家に結びつける原理をうみだした」とし、人々を国民化するために理性の崇拜、革命暦、メートル法、徴兵制、国語の普及などが推し進められたとしている。これは1970年代以降の研究成果を盛り込んだ解釈として注目される。

4. フランス革命・ナポレオン期の対外関係について、「封建的圧政からの自由をかかげてヨーロッパを征服。彼のまいた自由の種子は各地に民族意識を・・・」[20]、「戦争は従来の絶対君主のおこなう戦争と違って国民戦争の性格を持ち、封建的抑圧下にある他国民はフランス軍を自由の解放者として歓迎した」[21]、「革命の理念、自由主義、民主主義の精神を全ヨーロッパに伝え・・・大陸諸国の民衆は国民意識にめざめ、自由平等の革命の原理に、又は愛国心にめざめはじめた」[23]に見られるように、フランス革命軍を自由の解放軍として捉え、周辺各国がナポレオン軍を歓迎し、ナショナリズムを喚起したことが強調されている。
5. 極めて例外的ではあるが、フランス革命と植民地における黒人奴隷制について、「黒人奴隷制の廃止を宣言し、これに反対する奴隷主と奴隷とのあいだにサントドミンゴ植民地で内戦がおこり、1800年に黒人共和国がうまれた」[21] [24]との叙述が本文外ではあるが、現れたのは注目に値する。また、ナポレオンはユダヤ教徒（人）の解放を促したことに触れた教科書 [25] も出現した。
6. フランス革命の意義として、2の柴田氏の「フランス革命の意義」の他に、遅塚氏も「旧体制を倒して資本主義に適合した社会をもたらしたという意味で、市民革命（ブルジョワ革命）の代表的なものであったといえよう」「内外の強力な反革命勢力に対抗するために民衆や農民が積極的に革命に参加し、そのことが、フランス革命に民主主義革命としての性格を強くあたえた」[26]と総括している。

以上の様に、1960～80年代半ばにかけての世界史教科書におけるフランス革命・ナポレオン期の叙述に関しては、基本的枠組みは世界史発足時と変わっていないが、社団国家から国民国家への移行に見られる社会的結合関係の問題、社会経済史的にも封建的地の無償廃棄により農民が土地を獲得したという記述の修正、また、ソブールの影響、および日本国内における大衆運動の昂揚もあって、ジャコバン独裁期やバブーフの陰謀など民衆運動の役割が注目され始めている。一方、ナポレオンの記述では、周囲の封建的抑圧下にある諸民族が、ナポレオン軍を自由の解放者として歓迎という捉え方が強くなっていることが注目され、ナショナリズム・国民国家形成の諸問題が強調され始めてきた。また、植民地における黒人奴隷制とその解放についての叙述が登場してきていることは注目に値する。これは、全世界で植民地体制が崩壊し、また多極化が進むと共に冷戦体制が動揺、特に社会主義体制が行き詰まりを見せる中で、ナショナルな捉え方と自由主義・民主主義という価値観を強調する方向が出てきたことを反映していると思われる。そして、1970年代から徐々に台頭してきたフランス革命解釈における修正主義の研究に対しては、「資本主義に適合した社会をもたらした」という意味で市民革命であり、民衆の参加に

より民主主義革命であったとする見解が出されており、他の教科書も概ねこの方向で叙述がなされている。

IV. 「フランス革命200周年」と今後の課題

1989年は、日本では長かった昭和の時代が終わりを告げ、世界的にも冷戦の終結、東欧の革命、天安門事件等々に代表される激動期でもあった。その様な時に「フランス革命200周年」を迎え、フランス革命史研究においては修正主義の問題がクローズアップされ始めた。本報告では論争には触れず、世界史教科書の叙述の何が変わったかに重点を置いて問題点の整理を試みてみたい。

近江吉明氏は「フランスにおける革命期、ナポレオン期教育の実態」と題してフランスの歴史教科書の分析を行っているが、「フランス革命200周年」後、修正主義的フランス革命解釈は姿をひそめ、再び共和主義的解釈が全面にでたと報告されている。

日本においては、結論的に云うと、フランス革命をブルジョワ革命と見なすことに疑問を呈する教科書は出てきていない。基本的には前節の最後に挙げた柴田氏、遅塚氏によるフランス革命の意義を踏襲していると見られる。ただ、各教科書ともフランス革命の研究成果を背景に独自の特色を出そうとする努力が見られる。以下、「フランス革命200周年」(1989)、「学習指導要領の改訂」(1999)を挟んで、教科書叙述がどう変わったかをいくつかの例を参照し、分析してみた。

- 1) 1987年と2002年の東京書籍の教科書 [22] [27] を比較すると、旧版・新版とも前節で紹介した社団国家から国民国家への移行の説明に力点を置き、ほぼ同じ内容であるが、旧版の「民衆が革命に強力に介入することによって絶対王政や身分制が一掃され、自由・平等の革命理念とともに、国民国家の原理が確立された。この点で、フランス革命はもっとも徹底した市民革命となり、19世紀以降の世界に大きな影響をおよぼすこととなった」という文章の中から「民衆が革命に強力に介入」「最も徹底した市民革命」という部分が削除されている。また、ジャコバン独裁下の諸政策を「新たな国民意識を形成するための政治」と位置づけているのが特徴である。
- 2) 次に1983年と2005年度用の実教出版の教科書 [26] [28] を比較すると、旧版の「フランス革命の意義」はそのまま残し、更に「不平等の是正については社会各層の利害が鋭く対立したため、反対派を暴力で排除しようとする独裁や恐怖政治がもたらされ、・・・民主主義の理念は、19世紀以降の革命運動に大きな影響を及ぼすことになった」「国家権力が住民一人ひとりを掌握するとともに、住民の側でもフランス国民という自覚と愛国心を持つようになった。こうして従来 of 社団国家にかわる国民国家がうまれた」と付け加えている。更に、「ナポレオン法典と女性の権利」と題する囲みで、女性の権利が要求されたが、認められなかったことが書かれている。
- 3) 次に1974年と2004年の山川出版の『新世界史』[21] [29] を比較してみると、旧版にあった「フランス革命の意義」の冒頭の文章である、国内外の新旧両勢力の対立がジャコバン独裁という急進的な段階を出現させ、19世紀以降に多くの理論と教訓を与え

たという部分が削除され、新たに「市民革命の理念は、人権宣言に見られるように、人びとの関係が自由と平等であり、このような人びと（市民）が国民として国家をつくる（国民国家）ことにあった」として、10年の間に様々な政治形態が出現、それが19世紀前半のヨーロッパ各国のモデルとなったことが書かれている。また、「近代革命の比較」と題する囲みの中で、「革命をまもるため革命独裁という急進的局面をつくりだし、20世紀のロシア革命につながる面をもった」と19世紀以降とのつながりを視野に入れた叙述が為されている。

- 4) 同じく山川出版の『詳説世界史』[20][30]は、執筆者が全面的に変わったので、比較の対象とはならないが、旧版には無かった革命の意義について「有産市民層が旧制度を廃棄して、その政治的発言力を確立する結果となった。農民・都市民衆は旧制度の廃棄に重要な役割をはたしたが、同時に、有産市民層が推進した資本主義経済にも反対した。フランス革命はこのように、貴族・ブルジョワ（有産市民）・農民・民衆という四つの社会層による革命がからみあって進行したために、複雑な経過をたどることになった」と戦後のフランス革命史研究の動向を反映した叙述を加えている。
- 5) その他、三省堂の教科書[31]も執筆者が変わり、新版では「18世紀後半のヨーロッパ大陸は全体として変革期にあった。プロイセン・オーストリア・ロシアなども、啓蒙専制君主のもとで官僚・行政制度や封建的な農業制度の改革がなされていた。フランス革命はそのなかでもっとも劇的な変革で、普遍的な理念にもとづくものだった」と同時代の大陸諸国の諸改革の中にフランス革命を位置づけている。

また、帝国書院の教科書[32][33]は、アメリカ独立を前章「ヨーロッパの危機と大西洋ネットワークの強化」に移し、「工業文明による世界支配の時代」の章で、産業革命の後に「フランス革命とラテンアメリカ諸国の独立」として、二重革命の時代、環大西洋革命の一環としてフランス革命を描いているのが特徴である。

「フランス革命200周年」「学習指導要領の改訂」を挟んで、同じ出版社のフランス革命叙述がどう変化したかを見ると、全体的に言えることは、社団国家から国民国家への移行過程での政治文化的側面を重視する教科書が多くなってきている。これは最近の歴史学会での大きな課題のひとつである「国民国家を問う」という問題意識を反映していると思われるが、それに伴い国民意識、ナショナリズム、愛国心、国民的統合などの問題がフランス革命を舞台に問われているのが特徴と思われる。

その他、フランス革命における女性の権利についての叙述、環大西洋革命の一環としてアメリカ独立革命とともにフランス革命をとらえ、ラテンアメリカでの黒人奴隷蜂起、ハイチの独立、ラテンアメリカ諸国の独立と関連させている叙述、また、18世紀の同時代の欧米の諸改革の中でのフランス革命の位置づけなど各教科書ごとに特色を出している。

以上、日本においてフランス革命・ナポレオン期をどう描いてきたかについて、明治期からの歴史教科書の叙述を中心に概観してきた。

それでは、最後に現在の日本の世界史教育の側から見てフランス革命・ナポレオン期叙述の課題は何であろうか。

1. ひとつは、最近の日本国内における過度のナショナリズム傾向にどう対処するかという問題で、これは一国中心主義あるいは一国史的視点からは解決策を見いだすことが困難な問題である。フランス革命からナポレオンの時期において、ナショナリズムの高揚、国民意識、国家的統合の問題、それらを背景にしたナポレオンによる大陸支配の過程をもう一度振り返り、立法議会から国民公会にかけての対外戦争は、攻められた戦争で、国民は義勇軍を結成し撃退し、徴兵制により国民軍を結成したという捉え方で、ナポレオンの時期までのナショナリズムを捉えられるのか、ここまでは良いナショナリズムで、それから先は侵略的ナショナリズムと区別することが、果たして現代の課題に答える事に成るのであろうか。
2. ふたつ目は、2001年9月11日以降、テロリズムと欧米流の自由主義・民主主義の強制が問題となっている現在、フランス革命からナポレオン期に至る過程で、①「9月の虐殺」を始め「恐怖政治」などを革命のため、民衆のため、内外の反革命に勝利するためという論理で正当化出来るか。あるいは逆に、テロだと言うことで非難し、歴史的価値を認めないのが正しいのか。②ナポレオンによるフランス革命の自由・平等の理念を封建制下の周辺諸国の国民に伝播し、封建制からの解放軍として迎えられたという見方は昨今のイラク情勢を見ていると、そんなに単純なこととは思えない節が出てくる。ナポレオン法典を中心とする自由・平等の占領地への適用は、どの様に受け止められたのであろうか。

21世紀を迎えた日本および世界の国々にとって、フランス革命から学ぶものは、まだまだ大きいのではないかと思われる。

引用教科書 一覧

戦前の「万国史」「西洋史」教科書については、国立教育政策研究所図書室、東書文庫図書室を利用、戦後の「世界史」教科書については、教科書研究センター図書室および青山学院高等部地歴科研究室保存の教科書を利用。

- [1] 文部省『史略』西洋（1872、『日本教科書大系』所収）
- [2] 文部省 田中義廉『万国史略』（1876、『日本教科書大系』所収）
- [3] ギゾー 永峯秀樹訳『欧羅巴文明史』（初版、1876）
- [4] フリーマン 関藤成緒訳『弗氏万国史要』（1888）
- [5] スウィントン 松島剛訳『斯因頓氏万国史要』（1886）
- [6] 天野為之『万国歴史』（富山房、1887）
- [7] 辰巳小次郎、小川銀次郎『万国史要全』（金港堂、1893）
- [8] 箕作元八『新編西洋史綱』（六盟館、1907）
- [9] 小川銀次郎『新編西洋史教科書』（金港堂、1908）
- [10] 峯岸米造『中学校用歴史教科書 西洋歴史』（六盟館、1922）

- [11] 大原貞馬『中等教育 万国小史』（丸善, 1896）
- [12] 齊藤清太郎『新編西洋史教科書』（明治書院, 1913）
- [13] 亀井高孝『中等西洋史』（啓成社, 1917）
- [14] 齊藤斐章、中川一男『中等世界史要』（大日本書籍, 1924）
- [15] 村川堅固『西洋史教程』（中等学校教科書株式会社, 1937）
- [16] 尾鍋輝彦ほか『世界史（上下）』（中教出版, 1951）
- [17] 尾鍋輝彦、中屋健一『現代世界のなりたち』（実業之日本社, 1951）
- [18] 史学会、林健太郎ほか『再訂 世界史』（山川出版, 1952）
- [19] 上原専禄、江口朴郎ほか『高校世界史』（実教出版, 1955）
- [20] 林健太郎ほか『詳説 世界史』（山川出版, 1974）
- [21] 柴田三千雄ほか『世界の歴史』（山川出版, 1974）
- [22] 中村英勝ほか『世界史』（東京書籍, 1987）
- [23] 井上幸治ほか『世界史』（実教出版, 1960）
- [24] 阪東宏ほか『新世界史』（三省堂, 1973）
- [25] 吉田悟郎ほか『高校世界史』（実教出版, 1980）
- [26] 遅塚忠躬ほか『世界史』（実教出版, 1983）
- [27] 福井憲彦ほか『世界史B』（東京書籍, 2002）
- [28] 遅塚忠躬ほか『世界史B』（実教出版, 2005）
- [29] 柴田三千雄ほか『新世界史』（山川出版, 2004）
- [30] 木村靖二ほか『詳説 世界史B』（山川出版, 2002）
- [31] 西川正雄、伊集院立ほか『世界史B』（三省堂, 2003）
- [32] 川北稔ほか『新編世界史』（帝国書院, 1999）
- [33] 川北稔ほか『高等世界史B』（帝国書院, 2003）

参考文献

- ・岡崎勝世『聖書 v s 世界史』（講談社現代新書, 1996）
- ・宮地正人「幕末・明治前期における歴史認識の構造」（『日本近代思想大系13, 歴史認識』岩波書店, 1991）
- ・満井隆行『外国史の研究—その史的研究』（葵書房, 1966）
- ・二谷貞夫『世界史教育の研究』（弘生書林, 1988）
- ・村川堅太郎・高橋幸八郎ほか『西洋史提要』（秀英出版, 1949）
- ・G. ルフェーヴル著／柴田三千雄・遅塚忠躬訳『1789年—フランス革命序論』序文（岩波文庫, 1998）
- ・河野健二『フランス革命200年』（朝日選書, 1987）
- ・近江吉明「フランスにおける革命期・ナポレオン期教育の実態」（専修大学人文科学研究所編『フランス革命とナポレオン』未来社, 1998）

- ・柴田三千雄『フランス革命』（岩波セミナーブックス30）（岩波書店, 1989）
- ・小林良彰『高校世界史におけるフランス革命論批判』（三一書房, 1989）
- ・遅塚忠躬『フランス革命－歴史における劇薬』（岩波ジュニア新書, 1997）
- ・拙稿「明治期における国民の対外観の育成－万国史教科書の分析をとおして」増谷英樹/伊藤定良編『越境する文化と国民統合』（東京大学出版会, 1998）
- ・拙稿「日清・日露戦争と国民の対外観の変化」（青山学院大学教育学会紀要『教育研究』第44号, 2000）